



問 題

昨年（2007年）横綱朝青龍が、8月の夏巡業について怪我を理由に休場届けを出しながら、帰国先のモンゴルでサッカーに興じていた場面がテレビで放映され、その後相撲協会から一定期間の出場停止などの処分を受けた。

この事件に関連して、下記のA～Dの立場に立って指定された条件に従いながら、それぞれの議論を、300字以上500字以内で展開しなさい。

- A 一般常識と資料甲の事実に従って（資料乙の事実は除く）、処分を協議している2007年8月1日の相撲協会臨時理事会の中で、比較的軽微な処分（「1場所のみの出場停止」または「謹慎と減俸のみ」）を主張する理事に反論して、他の理事の説得を目的として、もっと重い処分を行うべきだ、と主張する議論。
- B 一般常識と資料甲の事実に従って（資料乙の事実は除く）、2007年8月3日の日本の新聞への投書として、新聞読者に対して、実際に行われた相撲協会による処分が重すぎると主張する議論。
- C 一般常識と資料甲の事実および8月4日以降明らかになった資料乙の事実に従って、朝青龍の代理人という資格で、日本の世論に向けて朝青龍の行為と人格を弁護する議論。
- D New York Times（米国の新聞）のコラム（評論記事）に載るものと想定して、この事件に例示されている日本のマスコミの報道姿勢や日本社会のかかえる問題を批判的に論評する議論。

【解答作成上の注意】

上のA～Dの4つの議論は、それぞれ独立のもののみなし、独立に採点します。そのため、他の欄で書いたことでも、必要な場合には議論を繰り返して下さい。



以下の資料は、資料甲・乙のいずれも、朝日新聞オンライン記事検索「聞蔵」によっているが、一部記述の内容や順序を変更した部分を含む。

資料甲 (2007年8月2日朝刊に載った複数の記事より。)

7月24日、モンゴルに帰国。翌朝、左ひじ^{じんたい}靱帯損傷と腰の疲労骨折などを理由に夏巡業の休場届を提出したが夕方、モンゴルでサッカー元日本代表の中田英寿さんらとサッカーをしていた映像がニュース番組で流れた。26日、高砂親方が帰国を指示したが27日、巡業部は朝青龍が巡業参加を申し出ても拒否することを表明。30日、朝青龍は日本に戻り、北の湖理事長に経緯を説明して謝罪した。31日、在日モンゴル大使館が相撲協会に「無理にお願いした」とおわびしたが8月1日、臨時理事会で2場所の出場停止と謹慎、減俸の処分が決まった。

大相撲の横綱朝青龍(26) = 本名ドルゴルスレン・ダグワドルジ、モンゴル出身、高砂部屋 = がけがを理由に8月3日からの夏巡業の休場届を出しながら、モンゴルでサッカーをしていた問題で、日本相撲協会は1日、臨時理事会を開き、朝青龍に対し、9月の秋場所と11月の九州場所の出場停止、4カ月30%の減俸、九州場所千秋楽まで特別な事情がない限り、部屋、病院、自宅以外は出歩くことを禁止 の処分を下した。横綱が出場停止になるのは初めて。師匠の高砂親方(元大関朝潮)も監督責任を問われ、4カ月30%の減俸となった。

元横綱の北の湖理事長以下、相撲協会の幹部が集まったこの日の理事会は約40分。国内のテレビで元気にヘディングシュートをする姿が放送されたこと以外にも、過去にも様々な問題行動があった朝青龍の言動に厳しい意見が飛んだ。

理事の1人、秀ノ山親方(元関脇長谷川)がいう。「ああいう形でテレビで騒ぎになってしまった以上、仕方ない。無断帰国など、これまでの不祥事を含めた処分と受け取ってもらってもいい」。

会議前には「1場所の出場停止がいいところでは」の声が出ていた。しかし、異例の重い処分が出た背景には、本場所と並ぶ角界の2本柱である地方巡業を朝青龍が軽視した面と、横綱審議委員会からの申し入れが大きかった。

地方都市を回り、けいこや取組を披露する巡業は、年6回ある本場所とは違い、身近に力士とファンがふれあうことで相撲人気を保つ重要な行事になっているほか、新弟子発掘という側面もある。

今回の問題が明らかになった直後から、相撲協会へは抗議の電話が殺到。

横綱をつくるご意見番である横綱審議委員会からも「厳粛な処分を」との申し入れがあった。ファンを含めた協会の内、外からの厳罰を求める声に後押しされ



る形で、この日の処分は決まった。

会見した伊勢ノ海理事は「いろんな意見が出たのは事実。その中から理事長が大勢を占めた意見をまとめ、こういう結論になった」と話した。

朝青龍の問題行動歴

2003年7月 名古屋場所5日目の旭鷲山戦でまげをつかみ、横綱で史上初の反則負け。直後、旭鷲山の送迎車のドアミラーを壊す。8日目に風呂場で旭鷲山と口論、10日目から首のけがで休場。

モンゴルから帰国した際、髪を後ろに束ねただけのポニーテールで到着。まげを結っていなかったが、処分はなし。

2003年12月 無断でモンゴルに帰国し、先代高砂親方（元小結富士錦）の葬儀を欠席。年明けのけいこ始めと綱打ちも無断で休む。

2005年10月 神奈川・大和巡業のぶつかりげいこで、十両の白石（現白乃波）を失神させる。

2006年5月 夏場所2日目から休場したが、場所中に関取衆からモンゴル巡業の実施を求める署名を集めた。北の湖理事長から厳重注意を受け、謝罪。

2007年4月 夏場所前、時津風部屋への出げいこで、豊ノ島にプロレス風の技をかけて2週間のけがを負わせた。

横綱処分の前例

「横綱に推薦する力士は品格、力量が抜群であること」。横綱審議委員会の内規には、横綱の条件が「強さ」だけではないことが、明記されている。今回、2場所連続出場停止などといった厳しい処分を受けた朝青龍以前にも「品格」にかかわる不祥事を起こした現役横綱には、厳しい措置が取られた。

1949年10月、横綱前田山は大腸炎で秋場所を途中休場しながら、場所中に日米野球を観戦したことが判明。再出場を希望したが、協会に拒否され、この場所限りでの引退に追い込まれた。

1987年12月、失跡騒ぎなどを起こした横綱双羽黒は、師匠の立浪親方（当時）から廃業届が提出された。この時は、横綱推挙の責任を取る形で、日本相撲協会の全理事が減俸処分を受けた。

〔資料乙は、次ページに掲載されています。〕



資料乙 (2007年8月4日以降に載った複数の記事より。)

朝青龍，不安定 自宅で治療，「睡眠導入剤を使用」主治医が報告（2007年8月4日朝刊）

日本相撲協会から2場所出場停止と4カ月の減俸30%，九州場所千秋楽（11月25日）までの謹慎処分を受けた横綱朝青龍について，主治医の平石貴久医師が3日，東京・国技館に師匠の高砂親方（元大関朝潮）を訪ね，状況を報告した。

同医師によると，横綱は付け人らと東京の自宅にいて，治療を受けているという。「全治6週間」と診断されていたけがのうち，疲労骨折の腰は状態が上向き，左ひじも手術の必要のない見こみ。

ただし，厳罰を受けたショックが大きく，睡眠導入剤を使っているという。今後は心のケアに重点を置く。同日夜に再度，朝青龍を診察した平石医師は「病気ではないが，精神的に不安定なので，一度モンゴルに帰国させた方がいい」と語った。

「朝青龍，うつ病一歩手前」精神科医，帰国勧める（2007年8月6日朝刊）

日本相撲協会から2場所連続の出場停止処分を受けている横綱朝青龍が5日，東京都内の自宅で精神科医本田昌毅氏の診察を受け，「神経衰弱でうつ病になる一歩手前の状態」と診断された。

本田氏によると，朝青龍は復帰への意欲を見せているという。しかし，本田氏は「自分の考えがまとまらず 表情が暗いし，食欲もない。すぐに本人にとって最適な環境で療養するべきだ」と話し 横綱が希望するモンゴルへの帰国を勧めた。

一方，診断を聞いた師匠の高砂親方（元大関朝潮）は「モンゴルに帰せばいいということでもなく，ある程度は我慢が必要。6日か7日にも本人と会って話をしてみたい」と語った。

朝青龍，指名医の診断は「急性ストレス」（2007年8月8日朝刊）

大相撲の高砂親方（元大関朝潮）は7日，出場停止処分などを受けている横綱朝青龍が6日夜に日本相撲協会指名の心療内科・精神科の専門医の診察を受け，「急性ストレス障害」と診断されたと明らかにした。朝青龍はこれ以前にも，知人の精神科医に「神経衰弱でうつ病の手前の状態」と診断されていた。

診察中 横綱は問いかけにほとんど無言だったという。同親方は「2,3日様子を見たい。入院させるのも一つの手だて。モンゴルに帰国するのは良くないと思う」。

診察に同席した協会医務委員会の吉田博之委員長（相撲診療所長）は「数十分の診察で正確な診断を出すのは難しい。今後も要請があれば，専門医が診察出来るようにしたい」と話した。